

令和 5 年度

事業所名： グループホーム 愛の手(ユニット①)

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0390100030		
法人名	有限会社 ケアホーム 愛の手		
事業所名	グループホーム 愛の手(ユニット①)		
所在地	〒020-0133 岩手県盛岡市青山1丁目19-51		
自己評価作成日	令和6年1月25日	評価結果市町村受理日	令和6年4月22日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/03/index.php?action_kouhyou
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわての保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0871 岩手県盛岡市中ノ橋通2丁目4番16号
訪問調査日	令和6年2月22日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

コロナ禍となり、現在、面会、外出等が制限されておりますが少しでも充実した生活が遅れるように施設内でのレクや行事、活動等に取り組んでストレスを溜めないように、ご利用者様の笑顔の表出を心掛けている。ご家族様の面会時には玄関先ではありますが椅子を用意し、ご利用者様、ご家族様が遠慮せず談笑出来るような対応をしている。また、ご利用者様に対しては日々傾聴対応に努め、不安や寂しさを感じないように寄り添ったケアに努めている。日々の水分補給に力を入れたケアを実施し、ご利用者様の健康維持に努めている。日常生活にご利用者様それぞれの得意分野の能力を活用し、役割意識を持っていただけの生活が送れるよう支援している。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

事業所は、近隣にスーパーや病院、警察署、消防署、特別養護老人ホームがあり、生活環境の整った住宅地に立地し、町内会にも加入している。二階建ての2ユニットからなり、一階が9床、二階が6床で運営されている。職員は、グループホームの理念を基に、利用者に寄り添いながら、生きがいと喜びを感じていただけるよう、利用者が出来る事を推奨したり、身体機能や脳機能の低下を防ぐため、日々の生活の中でレクやパズルを利用し機能維持に努めている。家族には、毎月の手書きのお便りや、2ヵ月に1回発行の「愛の手だより」で事業所の生活状況をお知らせしている。また訪問診療や訪問看護師との医療連携もとれ看取りも行われており、利用者や家族から安心と信頼感持って受け止められている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当するものに○印		項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と
			2. 利用者の2/3くらい				2. 家族の2/3くらいと
			3. 利用者の1/3くらい				3. 家族の1/3くらいと
			4. ほとんど掴んでいない				4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)		1. ほぼ毎日のように
			2. 数日に1回程度ある			○	2. 数日に1回程度
			3. たまにある				3. たまに
			4. ほとんどない				4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 少しずつ増えている
			3. 利用者の1/3くらいが				3. あまり増えていない
			4. ほとんどいない				4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が	66	職員は、活き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 職員の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 職員の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)		1. ほぼ全ての利用者が	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 利用者の2/3くらいが
		○	3. 利用者の1/3くらいが				3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 家族等の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 家族等の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が				
			2. 利用者の2/3くらいが				
			3. 利用者の1/3くらいが				
			4. ほとんどいない				

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム 愛の手(ユニット①)

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価		
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
I.理念に基づく運営						
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	事業所の理念を玄関先に掲げ、職員、来設者に周知している。パンフレットにも示し職員の日常的ケアの規範としている。	事業所理念をもとに、個々の利用者が持っている機能を引き出し活かしながら、その人に合った役割や余暇活動など工夫し、笑顔のある生活が送れるよう支援している。理念を玄関に掲げ、職員や来訪者に周知している。朝夕の申し送りやケアカンファレンスで職員間で利用者の反応等を確認し合い、ケアサービスの向上に努めている。		
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍となり対面でのつながりは減っているが回覧板での情報収集や募金への協力、運営推進会議を通しての情報収集、伝達で地域の一員としての交流を心掛けている。	町内会に加入し、回覧板を回し地域の募金等の協力は行っているものの、コロナ禍のため町内会の行事には参加できていない。町内会長の働きかけで、公民館前でチャグチャグ馬コを見学することができたのは、利用者にとって楽しい体験となっている。		
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	コロナ禍となり家族会や敬老会等の各種行事など人を呼んでの企画はできなくなり、地域に向けての発信はほとんど出来ていない現状である。			
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議は2か月に一度開催している。開催時はマスク着用、手洗い、検温を実施して頂いている。 町内会長、包括、ご家族様、ご利用者様に活動、入居状況、健康状態、ヒヤリ・ハット、事故報告、参加研修等を報告し、助言を受けている。	運営推進会議は2ヵ月毎に対面で開催している。委員は町内会長、民生委員、家族、利用者、地域包括支援センター職員である。利用者も家族の傍にいたためか落ち着いて毎回参加している。会議では、事業所の入居状況や利用者の生活状況等を報告し、それに対する意見や要望を議事録に記録し、職員間で共有を図るとともに所内に掲示してサービスの向上に活かすよう心掛けている。議事録は家族にも送付している。		
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	盛岡市や地域包括支援センターへ運営推進会議録を提出し、多様な面での連携が図るように取り組んでいる。9月27日、盛岡市地域福祉課による運営指導があり口頭指導事項、指摘事項を受けて是正改善を行い、適切な施設運営に取り組んでいる。	今年度は市の運営指導の機会があり、その際幾つかの助言を受けた項目については、改善し運営に反映させている。また要介護認定申請時には、家族の代行として担当課へ出向く等しており、協力関係は築けている。地域包括支援センターから教えられた他事業所の情報等は、施設の運営や対応に役立てている。		

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名：グループホーム 愛の手(ユニット①)

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束廃止適正委員会を3ヵ月に一度開催し、身体拘束の廃止、適正化に向けて内部研修やアンケート調査等をを行い、全職員が意識的に取り組んでいる。身体拘束は高齢者虐待にもつながるため言葉遣いや不適切なケア防止に努めている。スピーチロックの軽減を目指し毎月、具体的な目標を掲げ全職員で取り組んでいる。	身体拘束廃止適正委員会を3ヵ月毎に開催し、身体拘束の適正化に向けた内部研修も年2回実施している。特にスピーチロックに関し、言葉遣いに気を付けてもらうように、「～したらだめ」はやめよう」のように月ごとの具体的目標を掲げ、全職員が意識して取り組み、成果が上がっている。管理者は職員に気になる行為が見られた時には、その都度気づかせたり、朝礼で注意喚起している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	各種研修会に参加し、認知症への理解を深め、日常のケアに活かしている。 管理者が常日頃から身体拘束は虐待につながる、不適切なケアの見直し、ご利用者様の生活に職員が入り込みともに生活すること、職員の都合に合わせるのではなく主体は常にご利用者様という意識で取り組んでいる。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	会社の方針で生活保護の方の受け入れを休止しており、コロナ禍もあり、現在は学ぶ機会はない。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には目的、入院した場合や施設内で骨折した場合の対応、看取り、日常生活費等について丁寧に説明している。料金の変更があった際は家族に書面にて同意をいただいている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議録での発言やご意見を議事録にして外部者が閲覧できるように玄関先に掲示している。また、議事録はご家族へその都度郵送している。 玄関先にご意見箱を設置してご家族様、関係者のご意見ををいただけるようにしている。いただいたご意見はケアマネ、管理者、施設長、社長に報告し朝礼にて全員に周知して情報共有を図り改善に努めている。	利用者の意向は、日々の生活の中で把握に努めている。家族からは、運営推進会議に来所した際や面会時、電話を掛けた時に伺っている。また毎月のお便りや2ヵ月毎に「愛の手だより」「運営推進会議録」を送付し、家族が発信しやすいように努めている。家族からいただいた意見や要望は、朝礼等で報告して職員間で共有し、運営に反映するよう努めている。家族へのアンケートを実施し、意向を把握することも検討している。	

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名：グループホーム 愛の手(ユニット①)

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	コロナ禍にて全体会議の機会は減っているが日々の申し送り、連絡ノート等を活用、ケアカンファレンスの場でサービス計画や業務等に関しての意見交換を行っている。	職員との個別面談は設けていないが、相談がある場合には管理者が随時対応している。日々の朝礼時や夕礼時、ケアカンファレンス時に日ごろ気づいている事等職員が発言できるよう心掛けている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	コロナ禍であるが、可能な限り慰労の機会を設けて職場環境の向上に努めている。社長の方から職員に外部研修参加の指示がありその都度参加し自己研鑽している。研修参加者は施設に戻り内部研修を行い職員全員に研修内容を伝え職員のスキルアップに繋げてる。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	定期的にケアカンファレンスを開催、何かあった際は朝礼時にミニカンファレンスを行って問題解決に努めている。カンファレンスに参加できない職員はメモ等にてご利用者の情報等を伝えるようにしカンファレンスで反映している。カンファレンス記録を回覧して全員に周知徹底を図っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループホーム協会定例会への参加、他事業所のケアマネや職員と接する機会がある時の情報交換を大切にしている。		

Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援

15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	新規契約の前に生活実態調査と称してご本人の状態確認の訪問をケアマネが行っている。書面情報だけではなくご本人から伝わる雰囲気や会話の伝わり方等を確認し、受け入れの準備が図られ、ご本人様、職員の安心確保に繋がっている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	施設見学、入所申し込みの段階で、当施設の特徴などを説明し、ご本人、ご家族の困りごとを確認、傾聴に努めている。出来ること、出来ないこと、不安に思っていること等を職員間で共有し支援に繋げている。		

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム 愛の手(ユニット①)

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	医科、歯科、看護との連携を図り、基本情報や聞き取りで必要に応じて補聴器業者、マッサージ、福祉用具の活用、インフォーマルサービスの必要性について確認をしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	ご本人の思いを優先ながら「一緒に」の声掛けを行い、家事やお手伝いをお願いし生活を共にする関係作りに努めている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	月に一度、日常の様子をお手紙で家族に送付しながら電話や来訪時に互いの意向を確認している。玄関先での面会ではあるがお互いの絆を深め合い支える関係を築けるように努めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	ご本人の直筆での年賀状の支援をしている。自室には手紙や写真飾り、馴染みを大切にしている。	コロナ禍前は、チャグチャグ馬っこを見学したり、肴町の七夕を見たり、高松の池等にドライブを兼ね出かけていたが、現在は出来ていない。年賀状のやり取りがあり、届いた年賀状を居室内の壁に飾っている利用者もいる。定期的に来訪する理容師や訪問看護師、訪問診療医が馴染みといえる。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	ご利用者の特性を考慮して居室や座席の配置を決めている。問題があった際にはその都度ミニカンファレンスを行い配置替え等の対応に努めている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入院した際には不安がないようケアマネがお見舞いに行っている。ご家族の問い合わせにも可能な限り相談にのり不安の解消に努めている。施設を移る際には担当ケアマネと情報交換を行いスムーズに移れるように支援している。		

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム 愛の手(ユニット①)

自己 自己	外部 外部	項 目	自己評価	外部評価		
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント						
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日常会話の中でご本人の思いを汲み取るように努めている。ケアカンファレンス、モニタリングで確認、情報共有を図り、本人の思いを代弁してサービス計画書に反映している。	利用者自らが積極的に思いを伝えることは少ないが、職員の問いかけや対応への反応、しぐさ、表情を確認し意向や思いを把握している。職員の対応次第で利用者の反応も異なることがあるため、決めつけてしまわないよう職員間で情報共有し、対応の仕方等を工夫するように心がけている。		
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	ご本人、ご家族、担当ケアマネ、前施設からのサマリー等で基本情報からこれまでの生活歴やサービス利用の経過把握に努めてる。			
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	ご本人の日常の会話や表情から現状の把握に努め、朝礼や夕礼時に申し送り、ケアカンファレンスの際に検討し情報共有を図っている。			
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	3ヶ月に一度モニタリングを行い、サービス計画書の見直しを図りより良いサービスの提供に努めている。ケアマネ自ら日勤帯の業務に入ることによりご利用者の状態把握がしやすくなっている。 モニタリングに基づいてにサービス計画書を見直し、より良いサービスの提供に努めている。	管理者であるケアマネージャーが利用者・家族から得た情報を加味してケアプランを作成し、その内容を利用者・家族に説明し、了承を得た上で本プランとしている。3ヵ月に一度、アセスメントを基にモニタリングを行いケアの方向性を確認、6ヵ月毎に、モニタリングを基に介護計画の見直しを行い、職員間で共有しながら、より良いサービスの提供に努めている。利用者の状態に変化があった場合には、随時見直しを行っている。		
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	毎日、個別のケア記録に日常の様子を記録し、特記事項は業務日誌に記入し、日々のミーティングや毎月のカンファレンスで介護実践に活かし、3ヵ月ごとのモニタリング、半年ごとのサービス計画書の更新に活かしている。			
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	現在、コロナ禍とインフルエンザ流行にて外出は控えておりご家族の面会も玄関先にてお願いしているのが現状である。夫が亡くなり通夜、火葬、葬儀に参列されたご利用者様もその後、体調を崩されることなく経過されている。			

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム 愛の手(ユニット①)

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナ禍で地域のボランティアの受け入れは控えている。ご家族様との繋がりが一番の拠り所となっており、回覧板、郵便物やご家族との電話、玄関先での面会等で地域との繋がりを保っている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	ご本人様、ご家族様の意向でかかりつけ医は決定されてはいるが時に決まっていない場合は、当ホームでの協力医療機関で受診や往診を行っている。	利用者全員が事業所の協力医をかかりつけ医とし、月に一度の訪問診療を受けている。診療前日には利用者個々の健康状態を協力医にファックスしている。また週に一度訪問看護ステーションの看護師に、健康状態のチェックを依頼しており、事業所・訪問診療・訪問看護ステーションの医療連携がとれている。特別科受診の際の同行は家族を原則としているが、出来ない場合には事業所が対応している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	訪問看護ステーションと医療連携の契約を締結し、入所者に対して24時間体制で、医療連携体制を築いている。毎週木曜日訪問していただき、状態に応じた処置や助言を頂いている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	入院時は施設側より介護サマリー、退院時は病院より看護サマリーをいただき情報交換を行っている。 病院の医療連携室のソーシャルワーカーと連携を密にし、その都度必要な情報を得ている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入所時にご家族様の意向を聞ける範囲で確認している。入所後ご本人様の状態悪化が見られた際にはその都度ご家族様の以降を再確認している。 医療連携により、重度化した場合の指針を定めており、全ご家族様の同意を頂いている。	看取り指針を作成し、入居時に利用者や家族に説明し意向を確認している。状態の変化があった場合には、その都度家族に意向を確認している。協力医と訪問看護師とが連携して終末期に向けた体制が出来ており、今年度は2人の看取りを行なった。これまでも看取りの経験があり、職員は比較的落ち着いて対応しているが、動揺する職員に対しては管理者がじっくり話を聴く体制をとっている。	

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム 愛の手(ユニット①)

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	年に一回、急変、緊急時の対応についての研修を行い、手当や対応方法を確認している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回以上の火災想定避難訓練を実施している。その他、地震を想定した訓練等も実施している。コロナ禍で地域との連携、協力体制は築けていない。	今年は日中と夜間想定火災訓練と地震想定訓練の3回を実施している。コロナ禍のため、地域の方々の協力をいただかず事業所内だけの訓練となった。非常時には、まずは近隣に在住する町内会長、民生委員の協力が大切であり、その役割を担っていただけるよう働きかけを行いたいと考えている。来年度は、消防署への依頼を検討している。飲料水やレトルト食品等を10日分備蓄している。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	入浴時の男女の区分けや更衣、排泄介助時のカーテンやドアを活用してプライバシーへの配慮を行っている。ご本人様の過去の生活の把握に努め、その人に合わせた声掛けや会話を心掛けている。	指示的な言動や威圧的な態度にならないよう、また職員同士もなれ合いの言葉にならないよう日頃から気を付けている。利用者の居室に入る際にはドアをノックし、声かけしてから入室する事も徹底して行きたいとしている。入浴や排泄の際には、更衣室のカーテンを閉めたり、トイレのドアを閉める等、今後もプライバシーへの配慮を徹底して行きたいとしている。	利用者の尊厳を守ることの大切さについて、気づいた事柄を問題点として取り上げ、全職員が同じ認識を持って支援する事が大切です。そのため介護の場面で生じる課題をみんなが認識し、さらなるレベルアップを図ることができるよう、研修会等を積み重ねていくことを期待します。
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	ご利用者様本位の観点からその都度ご本人様に意向確認、お伺いをたててから介助している。日用品についてはご利用者様に負担して頂ける物、施設で提供すべきものとを明確に区別している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	ホームの日課としての流れはあるが、その人に合わせたペースで入浴日時やお手伝いの変更等ご本人に過度な負担とならないように支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	衣類は混乱の無い様に可能な限り、ご本人様に選んでいただいている。洗面所の鏡にて髪型等を確認できるよう支援している。定期的な散髪でご本人様の希望を取り入れている。		

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム 愛の手(ユニット①)

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食材切りや下ごしらえ等、ご利用者様と会話をしながら一緒に行っている。ご利用者様の好みを聞き、メニューに反映させている。	基本の献立は本社から届き、それを基に在庫食材を勘案したり、利用者の希望を取り入れながらメニューを考え、近くのスーパーで食材を購入している。利用者の好みを聞きとり、メニューに反映させている。誕生会には本人の希望を取り入れた献立とし、季節毎の行事食も好評である。利用者は食材の皮むき、刻み、お盆やコップ、テーブル拭き等、出来る事を手伝っている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	体重や血液検査の結果などからその人に合わせた食事量に調整している。食事形態も工夫し、刻んでトロミをつけたり、食べやすいサイズに合わせたりしている。適正な水分摂取量を確保するため、お茶やポカリスエット提供時にその都度摂取量をチェックしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後その人に合わせた口腔ケアを行い、口腔内の清潔保持に努めている。手指汚染が見られた際にはその都度爪切りや洗面所にて手指清拭を行い清潔保持に努めている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	出来るだけトイレでの排泄を心掛け、布パンツにパッドを挟み、出来るだけリハビリパンツやオムツの着用を控えるように支援している。両手引きにてトイレにて排泄をしているご利用者様もいらっしゃいます。	自力排泄に力を入れ、日中は全員トイレで排泄している。声掛けをしなくても自分でトイレに行く方は一階と二階に2名ずつおり、他の方は排泄パターンや仕草を見てトイレ誘導を行っている。布パンツ使用者は二階に1名、夜間のみオムツ使用は、一階、二階とも各1名で、それぞれ利用者の状態に合わせて使用している。レクを利用して下肢の筋力低下にならないよう努めている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便秘がちなご利用者様には朝食時に乳製品を提供している。水分摂取を心掛けながら適度な運動を毎日、実施している。		

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム 愛の手(ユニット①)

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	原則、週2回の入浴としているが入りたくないと話される時もあるため、ご本人様の希望の時間や順番で入浴できるよう配慮している。どうしてもその日に入りたくないという場合には翌日に変更したり、清拭を行うようにして対応してる。	月、火、木、金のうち週2回、原則午後2時からの入浴としている。異性介助は入居時に確認しているが、現在は嫌がる人はいない。入浴を嫌がる場合は翌日に変更したり清拭を行うようにし、個々に合わせて支援している。現在は一階の風呂だけを使用し、9名がリフト浴を利用している。入浴剤を使用したり、季節に合わせて菖蒲湯やゆず湯にし、喜ばれている。入浴時間は職員とのコミュニケーションの時間となっている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日々の就寝時間がずれないように、テレビや電気の消灯に配慮している。眠れないご利用者様には声を抑えて会話、傾聴対応し他ご利用者様の安眠を妨げないように配慮している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	今、服用している薬と効能を一覧にして、見えるところに掲示している。毎日、朝礼や夕礼時にご利用者様の状態を確認している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	生活歴や日々の会話の中から、楽しいこと、やりたいことを探り、レクリエーションやお手伝いの工夫をしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。 又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍で外出は制限させていただいている。ご家族様にご協力をいただきながら外出支援する場合もある。	コロナ禍前は、外出や外泊、ドライブをしたり、近くの公園の散歩もしていたが、今は、戸外に出る機会は無くなっている。自宅への外出は良しとしているが、出かける方はいない。戸外に出ることの重要性は承知しており、感染状況を考えながら進めたいとしている。外出が難しいため事業所内で楽しめるレクリエーションや、上下肢の運動、手先を動かす作業なども加え、日々の暮らしに潤いが持てるよう工夫している。	外出は気分転換やストレス発散の機会と考えられるので、コロナ感染対策に留意の上、工夫しながら外出が可能になるよう検討されることを期待します。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	ホームではお金の管理はしておらず、ご家族様をお願いしている。コロナ禍にて外出の機会がないため金銭管理の機会もない。		

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム 愛の手(ユニット①)

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	ご本人からの依頼やご家族の希望で電話やハガキは必要に応じてその都度対応している。携帯電話を所持されているご利用者もあり、対応可能な範囲で取次ぎや掛け方の支援をしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	コロナ禍で今まで以上の換気が求められており時間を決めて換気をするようにチェック表を作成し記入している。加湿器、パネルヒーター、ファンヒーター等で快適な空間を作るように支援している。また、季節に応じた共同作品等を飾り、少しでも居心地が良くなるように努めている。	一階、二階とも共同のホールにはテーブルやソファがあり、室温もパネルヒーターやファンヒーター、加湿器を使用し適温に保たれている。特に換気に気を配りチェック表で管理し、感染予防に取り組んでいる。両階ともホールや壁面には職員と利用者が一緒に作成した貼り絵や折り紙で作った作品が飾られ、その中で、利用者は自分の好きなように時間を過ごしている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ホール内の椅子以外にソファを活用して時間になると配置換えして、思い思いに場所で過ごして頂けるように工夫している。また、会話を楽めるようにテーブル席の配置にも配慮している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもをを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入所時に思い入れのある品物を持ってきたり、たくさんお願いしている。額や本、人形など大切な思い入れのある品物を持ち込み大切に取扱いしている。	居室の入り口には名前が書かれた手作りの暖簾があり、部屋の中には電動ベッドとクローゼットが設置されている。利用者は自分が作った作品や家族の写真や手紙、小タンスや人形など思い思いの品を持ち込み、居心地よく過ごされている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	歩行時に支障がないように物の配置に気をつけている。 いたるところに手すりを設置し、手すりには洗濯物等は極力干さないようにしている。		